

## World BOSAI Forum 2023 で「インクルージョン×防災」セッションを開催しました (2023/3/11)

テーマ：多様性、誰一人取り残さない、私たちのことを私たち抜きで決めないで、文化・芸術、SDGs  
URL：<https://worldbosaiforum.com/2023/news/detail--id-269.html>

2023年3月11日(土)、World BOSAI Forum 2023のセッションとして「インクルージョン×防災：全ての人々が自分らしく生きられる世界の実現を目指して」を仙台国際センター大ホールで開催しました(日英同時通訳、手話通訳、日本語要約筆記あり)。原裕太助教(2030国際防災アジェンダ推進オフィス)がコーディネータを務め、大ホール・オンライン合わせて国内外から200名以上の方にご参加頂きました。

本セッションは、科学技術振興機構(JST)が進めるSDGsの達成に向けた共創的研究開発(SOLVE for SDGs)プログラム「最後の一人を救うコミュニティアラートシステムのモデル開発および実装」プロジェクト(代表：小野裕一(2030国際防災アジェンダ推進オフィス))が主催し、2030国際防災アジェンダ推進オフィスと東京大学大学院総合文化研究科・教養学部のSDGs教育推進プラットフォームが共催しました。また国連人口基金(UNFPA)駐日事務所とも連携して広報を行い、会場入口ではUNFPAの活動資料、オリジナルグッズを配布しました。

SDGs教育推進プラットフォーム・2030国際防災アジェンダ推進オフィスで大切にされる「誰一人取り残さない」という考え方は、防災でも重要です。第3回国連防災世界会議を経て「インクルーシブ防災」が国際社会の優先事項となりました。一方、各地の被災地・紛争地では、現在も様々なバリアによって周辺化されやすい多くの人が様々な課題に直面しています。本セッションでは、あらゆる人が命や暮らし、健康を守り、必要なサービスにアクセスできる社会を構築するために、私たちに何ができるのかを考えることを目的に、以下の方々にご登壇頂きました(所属は当時)。

井筒節 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 特任准教授、第3回国連防災世界会議・国連経済社会局「障害を包摂した防災」パブリックフォーラム議長

成田詠子 国連人口基金(UNFPA)駐日事務所長

田中浩一 劇団四季 元代表取締役副会長、舞台「アラジン」等のプロデューサー

曾田夏記 自立生活センターSTEP えどがわ当事者スタッフ、DPI日本会議特別常任委員

菅田利佳 東京大学教育学部生

まず、メンタルヘルスにご専門の井筒特任准教授から、インクルージョンは私たち一人一人の様々な側面と関連する身近なイシューであること、とくに障害者権利条約との関わりについて、お話し頂きました。その上で「障害」とは医学的コンディションではなく社会の側のバリア(障壁)であること、具体的には車椅子ユーザーが段差で移動できないような「環境のバリア」、手話通訳等がないために情報を得られない「情報のバリア」、盲導犬を連れてレストランに入れられない等の「制度上のバリア」、そして先入観や間違った認識で障害者やLGBTI等に接する「態度のバリア」があり、これら種々のバリアを平時からなくすことがインクルージョンに繋がり、災害時により多くの命を救うことにも繋がると指摘されました。

次に、「性と生殖に関する健康・権利」を推進するUNFPAの幹部として、途上国各国の現場で長く活動されてきた成田所長に、性やジェンダーに焦点を当ててお話し頂きました。トルコ・シリア大地震の被災地では、厳しい環境下で22万人以上の妊産婦が暮らし、デマやフェイクニュースに基づく暴力にも晒されていること、現場ではマタニティキットや生理衛生用品の配布、シェルターの支援等、女性の健康と尊厳を維持するための活動が実施されていること等が、最新の現地情報を用いて紹介されました。またバングラデシュではトラン

(次頁へつづく)

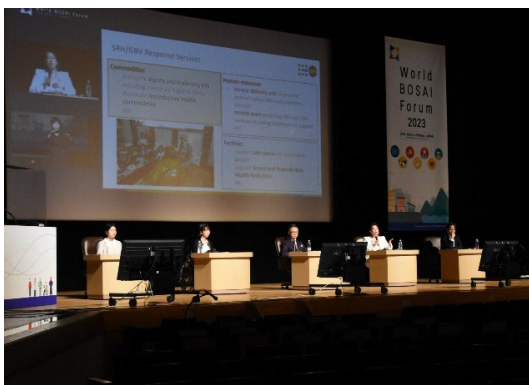
スジェンダーへの支援が進められており、ヒゲが伸びてしまうトランスジェンダーの方にとってカミソリは単なる衛生用品ではなく、人間としての尊厳を保つために非常に重要なものであること等が紹介されました。そして、社会的に弱い立場に置かれた人々の声を意識的に聞くこと、聞く仕組みを整備していくことが重要であると指摘されました。

劇団四季の田中元副会長には、東日本大震災の津波被災地 13 都市で子どもたちを招待して開催された特別巡演「ユタと不思議な仲間たち」のエピソードをお話し頂きました。同作品は、都会から東北にやってきた転校生「ユタ」を主人公に、命の大切さ、友情、信頼等の重要性を描くミュージカルです。岩手県大槌町の一人の生徒から寄せられた手紙がきっかけで被災地に演劇を届けるプロジェクトが立ち上がり、現地の人々の協力で体育館を会場に上演するに至ったこと、上演までの迷いや苦悩・課題、活動を通じて得られた気づき等が、映像を交えて紹介されました。そして、笑いたい時に笑い、泣きたい時に涙し、感情を解放できることが大切で、子どもたちに少しでも心の変化をもたらすことができたなら、演劇に携わるものとしてこれほど嬉しいことはない、との思いを述べて締めくくられました。

障害当事者として障害者の自立支援に携わる曾田氏には、フィリピン農村部の障害者団体での活動と、ほぼ全域が浸水想定区域に指定される東京都江戸川区での支援活動についてお話し頂きました。台風襲来時に逃げ遅れ、命を失った車椅子ユーザーの方のエピソードや、災害後も情報が手に入らない聴覚障害者の仲間の様子等を例に、平時から「誰も取り残さない」ことに取り組んでいかなければならないこと、加えて、障害者は「災害弱者で脆弱な人たち」と捉えられることが多いが、障害者だから気づけることや独自のネットワークがあり、障害者も助ける側に回ることができること、災害が起こる前から当事者の声を聞きパートナーシップを築いていくことが重要であること等を、具体例を示して指摘されました。

大学生の菅田氏にはユースを代表してご登壇頂き、協力したい人がその気持ちを表明できるようにする「協力者カミングアウト」、若者向けオンラインメディア・ボイスオブユースジャパン等の取り組みをご紹介頂きました。「マークを身につける」というヘルプマークのように協力を必要とする人が身につけることが想像されるが、知らない場所に行けば誰もが道に迷うかもしれない一方、車椅子ユーザーはバリアフリーの道をよく知っている。協力する／してもら関係性において、個人のステータスや属性は問題ではなく、その場のニーズや各々ができること・得意なことが重要な要素になるのではないかと指摘されました。

以上のように、本セッションを通じて、あらゆる人が取り残されるリスクを抱えていること、同時に誰もが支援する側に回ることができること、だからこそ多様な声を反映できる平時からのパートナーシップ・協働が重要であることを、確認、発信することができました。主催プロジェクト並びに 2030 国際防災アジェンダ推進オフィスとしても、ご協力頂いた各機関・団体との連携をさらに深め、研究開発に活かしていく予定です。



セッションの様子



登壇者と原助教（中央奥）の集合写真